

情動が記憶に及ぼす影響の年齢差に関する研究 —ポジティヴィティ効果に着目して—

宮野原 勇斗

高齢期には、注意力や記憶力などの認知機能が低下するのにもかかわらず、気分は安定しているという逆説的な関係が観察されることが知られている。現在、情動と認知機能の相互作用に関する研究が数多くなされており、ポジティヴィティ効果という現象が注目されている。ポジティヴィティ効果とは、若年者と比較して、高齢者がポジティブな情報を選好して処理したり、ネガティブな情報の処理を抑制したりする現象のことである。本論文では、高齢者の記憶におけるポジティヴィティ効果がどのような機序で生起しているのか検討することを目的とした。

ポジティヴィティ効果の生起機序を説明する理論には2つの立場が存在する。社会情動的選択性理論(SST)は、高齢者のポジティブな情動を得ようとする意図的な動機づけが、ポジティヴィティ効果を出現させると説明している。一方で、力動的統合理論(DIT)は、加齢に伴い認知機能が低下し、ネガティブな情報の処理が困難になることで、非意図的にポジティヴィティ効果が生起すると説明している。本研究では、SSTとDITのいずれがポジティヴィティ効果を説明するか検証した。

研究1では、情動を喚起する修飾語と喚起しない名詞の対を記銘し、自由再生および手がかり再生するという Emotion cued-Recall 課題を用いて、記銘段階および想起段階において情動が記憶に及ぼす影響を検討した。まず、若年者群と高齢者群の間にポジティヴィティ効果が生起するか検討した。さらに、高齢者を対象に、ポジティヴィティ効果と認知資源との関連について検討した。その結果、若年者群と高齢者群の両群においてポジティブ優位性が出現し、高齢期におけるポジティヴィティ効果は確認されなかった。認知資源とポジティヴィティ効果の関連については、認知機能高群において試行の進行に応じてポジティブ条件の再生数のみが増加するという、ポジティブ優位性がみられた。この結果から、記銘段階におけるポジティヴィティ効果の生起機序として、SSTが支持された。

研究2では、物語作成再生課題を用いて、想起段階において情動が記憶に及ぼす影響を検討した。その結果、高齢者群でポジティヴィティ効果は認められなかった。しかし、遅延の想起時に若年者群では、ポジティブ感情語が減少したが、高齢者群では維持されたという点で、若年者と比べて、高齢者の記憶のポジティブな側面は失われにくいことが示された。認知資源とポジティヴィティ効果の関連については、認知機能低群においてネガティブ優位性の減少が顕著にみられた。すなわち、想起段階におけるポジティヴィティ効果の生起機序としては、DITが支持された。

研究1と研究2を踏まえて、記銘段階および想起段階それぞれにおけるポジティヴィティ効果の生起機序としてSSTとDITのいずれが妥当であるか考察した。また、研究1と研究2で不一致だった結果を踏まえ、ポジティヴィティ効果の生起機序について新たな枠組みによる説明を試みた。すなわち、高齢者は、日常の場面ではネガティブな情報から目をそらしたり、記憶しなかったりする傾向がみられると考えられる。加えて、認知機能が高い高齢者は、難しい判断や選択を要求されるような認知的努力を要する場面に直面した場合に、論理的にポジティブな情報に注意を向けたり、記憶したりする傾向がみられると考えられた。

結論として、情動が記憶に及ぼす影響について、年齢差は部分的に認められた一方で、高齢者の認知資源という個人差も大きく影響することが示された。(臨床死生学・老年行動学)